

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01015

研究課題名（和文）清朝前半期における旗人の科挙応試に関する研究

研究課題名（英文）Research on Applications to Take the Imperial Examination by Bannermen in the First Half of the Qing Dynasty

研究代表者

鈴木 真（Suzuki, Makoto）

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60400610

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、清朝前半期（17～18世紀）において、いかなる出自・特徴の旗人が科挙に応試（受験）していたのか、そして旗人にとって科挙合格が、それ以後の官歴とどのように関連していたのかを明らかにしようとした研究である。

科挙に応試した旗人の出自は、零細な家柄の者、有力氏族の子弟や官界の高官を近親に持つ者など多岐に亘っており、当時の旗人社会では儒教的教養の修得が広く進行していた様子が窺える。また有力大臣との婚姻関係の構築や、皇子らの王府への配属の契機となるなど、旗人にとって科挙合格とは、官僚組織の公的な栄達ルートとしての位置付けに留まらず、八旗内部における権力基盤の構築・強化の面でも機能していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は以下の通りである。清朝前半期の科挙史について、旗人の科挙応試に関する研究史上の欠を補った点である。すなわち、いかなる旗人が科挙に応試していたのか、合格がかれらの官途にどの程度影響していたのかという、従来は不明であった点に関して網羅的に明らかにした。

合格した旗人の出自は零細・権門を問わず多岐に亘っており、中には数代に亘り合格者を輩出する家系も確認できた。これらは旗人社会における儒教的教養の修得（儒教化・士人化）が広く進行していた事実を示唆している。また旗人にとっては、八旗の権力中枢（旗王・権門）への接触の契機としても科挙が機能していた可能性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This research explores the familial origins and characteristics of bannermen who applied to take the Imperial Examination and the official careers they pursued as a result of success in the examination in the first half of the Qing Dynasty (17th -18th centuries). The research indicated that the familial origins of bannermen who took the Imperial Examination ranged widely from those from poor families to established clans as well as those who had high-ranking officials in their immediate families. The findings suggest that acquisition of Confucian ideas prevailed extensively in bannermen society at that time. Passing the Imperial Examination provided bannermen with opportunities to establish marital relationships with powerful ministerial families or secure posts to the imperial princes government, and functioned not only as an official career path to success in the bureaucratic organization, but also as a means to establish or strengthen their power bases within the Eight Banners.

研究分野：清朝史

キーワード：清朝 八旗 科挙 旗人 康熙 雍正 儒教化

1. 研究開始当初の背景

清朝(1636~1912)において、その軍事・社会制度である八旗に所属する人びとは旗人(満洲旗人・蒙古旗人・漢軍旗人)と呼ばれ、政権の支配層を構成した。かれらの父祖は、入関(1644)以前の太祖ヌルハチ・太宗ホンタイジによる女真(満洲)統一戦や、周辺勢力の征服戦において功績を立て、爵位(世爵・世職)を賜与された。子孫の旗人らは父祖の爵位を継承し、爵位に伴う俸禄を賜与され、また政権内部における官僚ポストの就任機会を優先的に与えられた。それに対して、被支配層である漢人が政権上層部に参画するためには原則として、伝統的な科挙に応試して合格することが必要であった。

しかし、入関前後には旗人の繙訳能力を測定する試験が実施されるようになり、やがて一般の漢人らと同じ科挙試験(文科挙)に応試する旗人も現れ始めた。この現象が、単なる旗人層の「漢化」を意味するのか、あるいは旗人らの官途において科挙応試・合格が何らかの利益をもたらしたためであるのかについては、不明である。そもそも一体どのような旗人が科挙に応試・合格していたのか、かれらが合格することによってその後の官歴にどのように影響したのかという点も、その全体像は未解明であった。

2. 研究の目的

旗人層の「漢化」といった通説的理解にとらわれず、いかなる出自の旗人が科挙(文科挙)に応試していたのか、合格後の就任ポスト・昇任ルートにはいかなる特徴があったのか、というこれまで未解明の明らかにする。そして旗人の科挙応試という現象が、時々の政権中枢の権力構造の変容や政治史上の事件とどのように関連していたのか(あるいは、関連していなかったのか)という、新たな視点より分析をおこなう。

最終的には、清朝が漢人社会の伝統である科挙をどのように利用し、また旗人たちは科挙にどのような役割を期待し、そして結果としてどのように科挙が機能していたのかという問題について、新たな像を提示する。

3. 研究の方法

本研究の基礎的作業として、清朝前半期(清初~乾隆朝)の旗人のうち、科挙(文科挙)に応試し、進士・挙人として合格した数百名を諸史料から抽出し、かれらの所属旗・出身氏族・親族、また合格後の官歴に関するデータを可能な限り収集した。

使用した主な史料は、基本史料である各種の列伝を中心に、科挙合格者の名を一覧する『八旗通志初集』『欽定八旗通志』『清代翰林伝略』『清朝進士題名碑録』等である。ただしこれらの史料には残缺も多く、より精度の高いリストを作成するために、大型史料集である『雍正朝内閣六科史書・吏科(全83冊)』『北京図書館蔵家譜叢刊 民族巻(全100冊)』『清代殊巻集成(全420冊)』(大阪大学)、『清代科挙人物家伝資料匯編(全100冊)』(筑波大学)等を利用した。

次に、かれらの出自(所属旗・出身氏族等)や科挙に合格した年代に基づきリストを作成し、どのような層の旗人が科挙に応試する傾向にあったのか、いつごろの年代に旗人の科挙合格者が増加するのか、等を明らかにしようとした。さらに各朝代のデータを総合し、その時代の旗人にとって科挙応試がどのような意味をもっていたのかという問題を、該当する档案史料・編纂史料と照らし合わせて、政治史の観点から分析した。とくに康熙朝半ば~雍正初年までの科挙は、政治史の事件に絡んでたびたび議論がおこなわれており、それらと関連付ける。そして最終的に、清朝前半期の旗人にとって科挙への応試がどのような意味を有したのか、また満洲人政権の清朝における科挙そのものの機能・位置づけについて、考察をおこなった。

4. 研究成果

清朝前半期における旗人の科挙合格者(旗人進士・挙人)に関する諸データを、上述の諸史料から収集した。その結果、列伝などに記載されているかれらの履歴とは異なる事例が少なからず確認できた。これが単なる誤記であるのか、あるいは所属旗の移動(移旗)など、政治的な背景を伴うものであるのかは、あらためて慎重に検討する必要がある。

清朝前半期において、いかなる出自の旗人が科挙に応試して合格し、その結果として当該旗人の官途にどのような影響を及ぼしたのか、また官界においてどのような人的関係を構築したのかという点について、網羅的に分析を進めた。その結果、以下の事実が明らかになった。八旗内の区分(上三旗・下五旗、満洲旗人・蒙古旗人・漢軍旗人、包衣の区分など)において、特定の

旗属に偏るような傾向はみられなかった。また零細な家柄出身の旗人進士・挙人だけではなく、任官機会に恵まれていたはずの有力氏族出身の旗人進士・挙人も少なからず確認できた。多種多様な旗人が科挙に应试・合格していたというこれらの事実からは、当時の旗人社会において儒教的教養の修得が広く進行していた様子が窺える。すなわち旗人にとって科挙への应试は、単なる昇進速度上の利点のみ期待したものではなかった。かといって単純な「漢化」と見なしている現象でもなく、先行研究において「儒教化」「土人化」として捉えられている概念と共通していると考えられる。

その一方で、康熙朝中期に科挙に合格した旗人進士の中には、それ以外の一般の旗人と比較して、顕著な速度で栄達した事例も存在したことは確かである。ただしそれらの旗人進士の共通点として、父祖に高位の旗人をもつこと、当時の宮廷の有力者との間に通婚などの密接な関係があったことが確認できることから、科挙合格という条件だけが栄達速度に影響していたわけではない。とはいえ後者の関係の起点は、当該旗人が科挙に合格し、翰林院に配されたことによって生じていたと考えられることは注目すべきである。また、旗人進士・挙人を出した氏族やニルが、皇子の王府に配属されている例も多く、これは儒教的教養を修得した旗人集団を意図的に王府に所属させていた可能性を示唆する。すなわち、科挙合格を契機として旗人の人的関係が新たに構築され、それが宮廷内の権力構造にも少なからぬ影響を与えていたのである。

この他、一般的な旗人進士と対比するために、科挙出身ではない旗人官僚にも焦点を当てた。具体的事例として取り上げた揆叙という旗人は、康熙帝の側近として長期間に亘って起居注官をつとめ、度重なる巡幸にもほぼ皆勤で扈從した。揆叙は旗人進士ではなかったが、旗人進士が最も必要とされていたと考えられる翰林院の要職を長く歴任した。このように非科挙出身でありながら翰林院の高官をつとめた旗人は、揆叙以外にも少なからず確認できる。この事実が意味しているのは、康熙朝において旗人の詞臣は必ずしも科挙の出身者には限定されておらず、一定の詩文の才能や儒教的教養を前提としながらも、有力旗人の家系の出身であるという点が重視されて、翰林院に配置されていたと考えられることである。

また雍正年間以降には、皇帝の母系氏族や、内務府（皇帝家の家政機関）に近い立場にある旗人の科挙应试が確認できる。これらの背景には、旗人社会における漢人文化の漸進的受容がいつそう拡大していた傾向が存在したと考えられるが、旗人らが当時の宮廷内の権力構造の変容に対応するため、官界における生存戦略として積極的に科挙に应试した可能性が高い。満洲人の王朝である清朝において、旗人らは科挙を積極的に利用しようとしていたのである。

以上をまとめると、以下の通りである。本研究により跡付けることができたのは、科挙に应试した旗人の出自は、貧しく零細な家柄の旗人から、有力氏族である権門の子弟まで多岐に亘っており、多種多様な出自の旗人が应试していたという事実であった。その中には数代に亘って合格者を出している家系も確認でき、官途における単なる栄達的手段としてだけではなく、旗人社会において儒教的教養の修得（儒教化・土人化）が進行していた様子が窺える。それ以外にも、科挙に合格した旗人らが翰林院において研鑽を積んでいる期間に宮廷内の有力な大臣家と婚姻関係を結んだ事例、また科挙に合格した旗人（あるいはかれらが所属するニル）が諸皇子の属下に配される事例が少なからず確認できるなど、八旗内部における旗人の勢力扶植・基盤強化の契機としても、清朝の科挙が機能していた可能性を指摘し得る。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 129 - 5
2. 論文標題 「回顧と展望：東アジア（中国 明・清）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『史学雑誌』	6. 最初と最後の頁 225 - 232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 19
2. 論文標題 「楊珍著『清前期宮廷政治釈疑』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『満族史研究』	6. 最初と最後の頁 51 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 64
2. 論文標題 「康熙帝と揆叙」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『社会文化史学』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 67
2. 論文標題 「ミンジュ家の婚姻関係からみた清朝康熙年間の宮廷内における権力構造」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『社会文化史学』	6. 最初と最後の頁 頁数未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木真
2. 発表標題 「八旗制からみる清朝史研究」
3. 学会等名 第67回中国四国地区中国学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------